

**小特集「日本・朝鮮近世の文学における「医者」表現」：近世における名医：『志都能石屋』『近世  
畸人伝』『皇国名医伝』をてがかりに**

著者	吉丸 雄哉
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	17
ページ	230(29)-213(46)
発行年	2020-03-25
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00023221">http://doi.org/10.15002/00023221</a>

## 近世における名医

### —『志都能石屋』『近世畸人伝』『皇国名医伝』をてがかりに—

吉 丸 雄 哉

#### はじめに

江戸時代に書かれた医者が出てくる小説を読んで不思議に思うのは、仮名草子『竹斎』の主人公竹斎のような数医者ばかりで、名医・神医と思える医者がほとんど出てこないことである。現代の小説・マンガ・ドラマに出てくる医者は名医ばかりで、名医が難病・奇病をなおす姿、あるいは病に苦しむ人々の気持ちに寄り添う姿が描かれる。山本周五郎の『赤ひげ診療譚』（一九五九）を原作とする黒澤明監督の『赤ひげ』（一九六五）や手塚治虫の『ブラックジャック』（一九七三〜一九八三）をはじめ、枚挙に暇がない。逆に数医者が出てくる話を探す方が難しいだろう。どんな病気も肝臓病にしてしまう肝臓先生を描いた坂口安吾『肝臓先生』（一九五〇）や変人精神科医伊良部一郎を主人公とする奥田英朗『イン・ザ・ブルー』（二〇〇二）『空中ブランコ』（二〇〇四）『町長選挙』（二〇〇六）ぐらいだろうか。前者は今村昌平監督『カンゾー先生』（一九九八）で映画化され、伊良部一郎のシリーズもテレビドラマや映画化されているので、奇矯な医者を主人公とした話も現代人の興味を強く引くのは間違いないが、医者を主人公とする話としては傍流なのは間違いない。

江戸時代で數医者ばかり描かれた理由のひとつは、圧倒的に數医者が多かったためである。これに関しては「近世小説の中の医者」という小稿をなしたことがある。<sup>(注1)</sup>現代と違って国家資格がないために生じた大量の町医者の質の低さが医者や医療の質を疑ってかかる姿勢に結びついたと言つてよい。しかしながら、日本独自の漢方医学が発展したのが江戸時代である。日本医学史において江戸時代は綺羅星のごとき名医が輩出されているので、小説に數医者ばかりが描かれるのは不思議である、しっかりと教育をうけた名医が民間より將軍家や大名家につかえた御典医に多かったのが理由のひとつだろう。

本稿ではもともと医者であり国学者の平田篤胤が医者について言及した『志都能石屋』<sup>(しずのいわや)</sup>を手がかりに日本の名医について考察したい。また、伴蒿蹊『近世畸人伝』と三熊花顛『続近世畸人伝』の医者の伝記と浅田宗伯『皇国名医伝』を比較して、名医とされる医者がどのように把握されていたかを分析する。

## 日本の医学伝記

江戸時代に編まれた医学伝記として、強い影響力があったのは、黒川道祐『本朝医考』（寛文三年序（一六六三）、奈須恒徳『本朝医談』初編（文政五年刊（一八二二））二編（文政一三年刊、一八三〇）、浅田宗伯『皇国名医伝』（嘉永五年刊（一八五二））だろう。

黒川道祐『本朝医考』は全三巻のうち上巻と中巻に医療関係者の伝記があり、上巻は<sup>おおなむちのみこと</sup>大己貴命から細川勝元まで百人ほど、中巻は和氣・丹波・竹田・吉田・曲直瀬一門・高取外科・馬島流眼科など三百人ほどの医家の伝記を記している。下巻は疾病史・医療史で医学史書としてまとめた内容である。『本朝医談』は、他の黒川道祐の編著である『雍州府志』『芸備国郡志』と同じく、訓点を施した漢文で記されている。それは格の高い書物であることを意味するが、結果として

読者も知的水準が求められ、好古の士のほか医者が読むことを想定していたと思われる。

奈須恒徳『本朝医談』初編・二編は伝記にかぎらず日本古代の医業・医方・医制・疾病に関する内容を古史書から抜粋したものである。初編の文政五年から八年して二編が出ていることから初編が好評であったと思われる。漢文体の『本朝医考』と異なり『本朝医談』は漢字仮名まじりの草書体で読みやすく、随筆集として享受されたと思われる。

畑維龍『皇国医林伝』は京都を中心にした儒医六八名を記し、後藤艮山・香川修庵・山脇東洋・吉益東洞といった古方派の大家の事蹟を評価する内容で、江戸の多紀氏などは収録されていない。訓点をつけた漢文体で書かれている。おそらく上方の古方派の医者を想定読者として著したものと思われる。

浅田宗伯『皇国名医伝』は正編が嘉永五年に刊行され、明治四年になって三巻の前編が刊行された。正編で江戸期の医者一四四人の伝記を記している。前編では日本古代から中世の医者が増補されている。詳細な記述で日本医学史の基礎的な資料となっている。訓点つきの漢文体である。幕末・明治初期に西洋医学が優勢になる状況のもと漢方医学の功績を顕彰しようという意図が読み取れる。

さて、ここで主要な医学伝記をあげたことはいよいよその検討から江戸時代における名医の考察に入るべきところだが、実際にはより複雑な事情を考慮し、それらの検討は先送りにせねばならない。

というのは漢方医学はもともと中国からの医書にもとづき、それらの医書を残した人々がまず名医として受け止められてきた。『傷寒論』の著者と目される張仲景は史書に記録が残らないが、『傷寒論』が古方派の聖典でもあるため、張仲景は名医の代名詞である。式亭三馬『人心覗からくり』下（文化十一年刊（一八一四））に「活田仲景」という替間医者が出てくるが、そのくらい庶民にも張仲景が名医とは知れ渡っていた。また、中国の史書に記された名医譚は日本において読み物として享受されており、日本人の医者のみが名医として認識されていたわけではなかった。漢方医学がもともと中国からの漢籍の移入で成り立っており、漢籍を読みこなすことが医学的知識を得ると同義である以上、医者に

ついでには中国も日本も名医に差はなく、もともと史書に残る伝説のほか、医書自体から名医であることを実感することもなくなくたはずである。そのあたりに日本独自の名医を語るにあたつて「本朝」や「皇国」という言葉が題名に入るのはとりたてて述べなければならなかったためであろう。

### 平田篤胤『志都能石屋』と医学観

平田篤胤は国学者であり医業を壮年まで営んでいた。平田篤胤が「世の中の俗医輩の、其風儀の宜しからざるを慨み憤りて、いかで此を揉直さむの心」(志都の石屋講本はしがき、早田弘道)にて医者的心得を講説したものを弟子たちが筆記したものが『志都能石屋』である。<sup>(注2)</sup> 篤胤自身はよくない医者との付き合いや「何ほど骨折しても。辛勞しても。療治を為損じたることも有り。殊に古道の学問は。日を逐つて急がしく成り。中々以て片手業に出来ることでは無い故に。医者はたと止めたことでごさる」(四八頁)と治療の努力にもかかわらず療治がうまくいかないことや学問が忙しくなったことを理由に医者をやめている。『志都能石屋』の実際の内容は「今日の処は。こりやたゞ。御医者方へ御聞せ申さうとての演説ではない。と思はれるが宜いでごさる」(四頁)と記すようにはしがきでいうほど高圧的な内容ではない。文化八年(一八一二)に成立し、ほどなく刊行された。口述筆記のため会話口調がそのまま記されている。

篤胤といえは平田派国学の祖であり、日本優位主義の思想がのちの尊皇攘夷運動に影響を与えたが、篤胤自身は幽冥界の構想にインド・中国に加えて西洋思想をひそかに援用するなど柔軟な面がある。

『志都能石屋』では、医薬の起源を大己貴命と少彦名命に想定することや、神農を祀ることの否定など皇国の医道の称揚につとめているのは国学者らしいが、批判の対象である漢土の医学について篤胤がよく知っていることもうかがえる。<sup>からくに</sup>「漢土の医は。もと巫祝と云て。まじなひ等<sup>など</sup>を為<sup>する</sup>者の致し始めたも有るでごさる」(二八頁)として『設文』『山海経』『黄

帝内経』『陰陽応象大論』『説苑』『論語』などを用いて医療とまじないの関係を考察している。なお、篤胤はまじないには好意的で「薬にしろ呪禁にもしろ。其病を療さうとて致すことは。正直き神の御霊に依ること。病に苦めらるゝ人の信じて是を受くる時は其信ずる処がすなはち直き神の御霊の相応たるのじやに依て。病の癒るも尤もなことでござる。」(三〇頁)と評価している。続けて「今の世に。医師を業といたす人は。世の並に呪禁などの法には。心を残さずして。薬の利みちをのみ能く学ぶが宜いでござる。但し俗には。加持呪禁法を甚だ信じて。医者に薬を貰ひ。また修験者など云に。祈祷まじなひをさするも多く有る。其を彼此やかましく云医者も有れど。是は心狭く拒むべきことでは無い。其れが実は古への道の趣でござる」と記す。まじないと医療を分離する近世の医療観からすれば、まじないの効果を認めている篤胤の医療観は独特に思われる。

### 『志都能石屋』と中国名医伝

『志都能石屋』が教えてくれることは平田篤胤のような国学者であっても、医者であった以上は漢籍をまったく排除することなく受け入れていたことである。近世では中医学から離れて独自の日本漢方学が形成されていったとはいえ、日本の漢方学も中国の医書を用いて証や方を組み立てている以上、漢籍は医学から絶対に切り離すことができない、それどころか医学そのものだったといつてよかつただろう。『志都能石屋』には医書や史書など漢籍がたくさん引用されている。『傷寒論』『黄帝内経』『素問』『千金方』『脈訣刊誤附録』『金匱玉函経』『本草備要』『医学原始』『養生要訣』『史記』『淮南子』『新語』『左伝』『周礼』『集韻』『説文』などに言及がある。

中国の医書・医者をおそれなく褒め称えており、とくに『傷寒論』の著者とされる張仲景の評価が高い。「傷寒論と申す医書がある。是は医方書の祖たる、第一めでたきもので、これを著れたるが、後漢の世の張機字は仲景と云賢き人で、

是は戎人<sup>からびと</sup>ながらも、篤胤が常にその御霊<sup>みたま</sup>のふゆを蒙つて居るに依て。御国の神に次では。額<sup>ぬか</sup>づき拌み居ます」(四九頁)あるいは「かの張仲景は。もと医者ではなけれども。傷寒論の自序に才いた趣きの実意から。医学をして。漢医の元祖、神医と云る程の名医で。其<sup>レ</sup>のまはることは。傷寒雜病論に記し遣された通りに。一々後世の規矩<sup>きく</sup>となる事どもでござる」と神に準じる扱いをしていることがわかる。

張仲景は同時代の『漢書』や『三国志』といった史書に記録がない。張仲景が編んだという『傷寒論』の自序やのちに校正を行った宋の林億らによる序文により事蹟がわかる。篤胤が『志都能石屋』に引用している『傷寒論』は序文から宋版かと思われる。寛文八年に岡島玄堤の翻刻があるほか寛政九年にも浅野元甫の翻刻がある。篤胤には『医宗仲景考』(松浦道輔・玉中春緒・川崎重恭校、文政十年序)という張仲景の伝記的考察があるほどで、強く関心を持っていたことがわかる。張仲景の『金匱玉函經』に注釈をつけた『金匱玉函經解』<sup>(注3)</sup>が伝わっている。

『志都能石屋』は『春秋左氏伝』秦の医者緩のエピソードと『史記』に登場する扁鵲については詳しく記している。いずれも名医とは未然に病気が起こることを察する能力を持つことを示すものである。

秦の医者緩のエピソードとは「病膏肓に入る」の故事である。晋の景公が夢で病気が二人の童子に姿を変えて、名医緩がくることに備えてどこに逃げるかを相談して膏と肓の間に逃げることにしたのを、緩が診察して病膏肓に入っているの助からないと言ったことによる。この話について「今とても有まい物でも無いでござる」(四一頁)という評価を篤胤は下している。

## 日本における扁鵲の受容

扁鵲の話は『志都能石屋』下巻の張仲景『傷寒論』の注釈として引かれている。扁鵲は中国の伝説的な名医であり、『史

記』『扁鵲倉公伝』に詳しい。

扁鵲は『史記』『扁鵲倉公伝』により名医として日本ではよく知られている。

扁鵲については『志都能石屋』が引用したほかに三、四話ある。『史記』の扁鵲伝を簡単にまとめると、

①官舎の舎長であったときに長桑君という隠者に薬と秘伝の医書を授かり、薬を飲むことによって五臓が透視でき病変がわかるようになった。

②趙の簡子が人事不省になり、扁鵲が呼ばれるがいずれ平癒すると診断する。

③號の太子が病死した直後に號を訪れる。中庶子から太子の様子を聞くが、太子は死んだように見えるがまだ亡くなっていないことを見抜き、鍼を打って蘇らせ、薬を与えて元気にさせた。

④斉の桓侯を診断して治療を勧めるが、桓侯は自分は病気ではなくお金のために扁鵲が治療を勧めていると考える。

扁鵲は計四度も治療を勧めるが桓侯は聞かず、最後は桓侯を遠くから見ただけでひと言も言わずに立ち去った。桓侯が人を遣わして理由を聞いたところ病が骨髓に入り込んでもう手遅れであると述べる。桓侯はそののち五日で具合が悪くなり扁鵲を呼ぼうとしたがすでに扁鵲は別の国に移っており、桓侯は亡くなる。

⑤扁鵲は名高くなり、行く先々で専門を変えた。婦人を大事にする国では婦人科医に、老人を大事にする国では耳目・冷痺の医者になった。小児を大事にする国では小児科医になった。秦の太医令の李醯は自分の技量が扁鵲に及ばないのを知って地位保全のため人をつかって扁鵲を殺させた。

原話は長いが篤胤は割と短くまとめており、③と④にあたる二つのエピソードを紹介している（五〇頁）。①は重要で結果からいえばその能力によって、號の太子や斉の桓侯の病気を診断できている。にもかかわらず、これについては触れられていない。

直接『史記』から伝わっただけでなく、和漢の故事を紹介する山本序周『絵本故事談』（正徳四年刊（一七一四））に



も収録されており、類書を通じても知られている。『絵本故事談』巻一に紹介される扁鵲の話は『史記』からとったことが記され、④桓侯のエピソードが簡単に触れられるが、実際には『史記』ではなく『列子』『湯問』に拠る話が紹介されている。

魯公扈趙斉嬰の二人が扁鵲に治療を頼む。扁鵲は公扈が志は強いが氣力がなくて実行力がないこと、斉嬰が氣力は強いが志がなくて思慮が弱いことを指摘し、二人に毒酒を飲ませて、人事不省になっている間に胸を裂いて心臓を入れ替える。氣がついた二人はそれぞれ別の家に返るので家族は不審に思うため、扁鵲が説明して納得する。明らかに現実味のない話であり、奇談としては面白かったのかもしれないが、望診から桓侯の病を見抜いた話に比べれば医者にとって教訓となる部分は少ない。篤胤も現実的に優れた医者として扁鵲を把握していたように思われる。

もともと「扁鵲倉公伝」なので扁鵲と倉公の兩人のエピソードで構成されている。併録された名医倉公（淳于意）は『志都能石屋』では触れられていない。太倉公は独学の修行から、公孫光ついで公乗揚慶に師事し、禁方を伝えられる。成果は多かったが、諸国を回っていたため、氣が向かないと治療をせず病人のある家では恨む者が多かった。漢の孝文帝にころ罪を訴えられ逮捕される。娘が帝に陳情したことで倉公は罪を許され、帝に呼び出されて九つの諮問をうける。治療の経歴として医案が二五例記される。顔色を遠くからうかがっただけで死期を見抜いた例もあるが、日常生活の過ごし方の注意を病因として指摘した合理的なものが多い。治った例だけでなく、死亡例も九例ある。

いずれにしても現代的な視点からすれば、扁鵲も倉公も神がかっているのだが、江戸時代ではこの二人の医療について真剣に考察した本が多い。版本だけでも浅井惟寅解・浅井正路補『扁鵲倉公列伝割解』（明和7刊）、多紀元簡『扁鵲倉公伝彙攷』（文化7刊）、中荃謙『扁鵲伝正解』（文政6刊）、高村幹斎『扁鵲志志』（天保3刊）、石坂宗哲『扁鵲伝解』（天保3刊）、堀川済『扁鵲倉公伝攷異並備参』（嘉永3刊）がある。写本も多く日本古典籍総合目録データベースによれば、森立之『扁鵲蒼公伝管見』、羽生良熙『扁鵲倉公伝原解』、海保元備『扁鵲倉公伝続攷』、長中行『読扁鵲伝』、馬場

北溟『芥舟学勘堂扁鵲伝』、伏竜子著・菊池周之校『扁鵲秋毫伝』、村井琴山『扁鵲伝解』、加藤熙『扁鵲伝口授』、吉益東洞『扁鵲伝評』、伊藤馨『扁鵲伝問難』がある。医学史に大きな影響を与えた『医断』の著者である吉益東洞や医学考証に優れた森立之が入っているのは注目される。『史記』『扁鵲倉公伝』に対して生真面目に考証を加えていく態度は伝説的な神医として尊敬するだけでなく、診察や療治について有効な知識を得ようという態度のあらわれだろう。その他、號の太子を鍼で扁鵲が蘇生させたことから、鍼術の本に扁鵲の名のつくものが多い。

### もうひとりの名医耆婆

並外れた能力をもって人を見るだけで病気を詳しく知ることができる扁鵲や倉公といった中国古代の名医のほかに、耆婆扁鵲と並び称される耆婆も超人的な能力を持つ伝説的な医者である。古代インドの名医で、仏弟子でもあった。頻婆娑羅王の王子で、阿闍世王の兄であり、父を殺した阿闍世王を導いて、仏に帰依させたといわれる人物である。『志都能石屋』には言及されないが、日本には仏教説話として十二世紀には入ってきて、その後俚諺にまで定着している。

もともと『奈女耆域因縁経』や『奈女耆婆経』にその事蹟がしるされており、仏教説話集『百座法談聞書抄』（1100頃成）には耆婆の話は記されている。室町頃の心敬『ささめごと』（寛正三年頃成（一四六三））下に「耆婆・扁鵲が良薬も、をしへのごとく養生なき人の病をばいやさずとなり。仏法をも歌道をも、心の至らぬ輩には、ただ其の人の心の至るままに示せともいへり」とあるほか狂言の虎明本『胸突』（室町から近世初頭頃までに成）「扱も扱も忝なひ、ぎばが薬も、これほどにはききまらずまひ」と名医として認識されるようになっていく。江戸時代のことわざ辞典にも『譬喩尽』（天明六成（一七八六頃））に「耆婆も手を空しゅうす」、『俚言集覧』（文政元年頃成（一八一八頃））には「耆婆扁鵲でもいかぬ」と名医として記される。医師でもあった都賀庭鐘は安世高訳『仏説奈女耆婆経』を鹿鳴野人名義で翻

案して訳し読本『通俗医王耆婆伝』（宝暦一三刊（一七六三））を残している。なおこの作品については福田安典、劉菲、木越秀子が考察している。<sup>（注）</sup>潤色をぬいた安世高訳『仏説奈女耆婆経』でいえば、もともと針と薬袋をもって生まれ、医師たちを驚かせるほどの知識を医学書から得ており、さらにかざすと体内を透視できる薬王樹を用いた治療で多くの人を治したとする。

扁鵲同様の伝説的な名医であるが、扁鵲と異なり、日本古典籍総合目録データベースによれば耆婆がタイトルに含まれる医書は写本で『耆婆五臟経』『耆婆流医書』『耆婆万金丹』と少なく、診察や医案を丁寧に考察された扁鵲や倉公と扱いが異なる。

なお、『志都能石屋』には西洋人の医学も言及しており、解体のことをよく明らかにしていると評価している。解体の趣きを知るのに『医範提綱』と『解体新書』を、また治療の心得として『内科撰要』を詳しいとしている。具体的に西洋人の名医をあげることはないが、病気の原因を調べるために少しかわった病気で死んだ人を西洋人は必ず解体して調べることを記している。

### 『志都能石屋』と日本の名医

篤胤は『志都能石屋』で張仲景をとくに崇め、扁鵲の話を引きが、日本の医者にも言及している。「北山友松子などは其治法が多く。後世ぶりでは有たなれども。其じの回ることは。其著書の考按に。偽りのない処で明かでござる。」（五七頁）と北山友松子が評価されている。北山友松子は通称寿安といい北山友松子や北山寿安の名での医書は一四点におよび、刊本では『衆方規矩』の増補版の『刪補衆方規矩』（延宝頃刊）や治験を記した『北山友松子医案』（元禄頃成、延享二年刊）や明の呉崑『医方考』に注釈を付した『医方考繩愆』（元禄十年刊）の著述があり、おそらく篤胤はこれらを読んだのだ

ろう。著作をみて人物評価していることは、張仲景を『傷寒論』から評価していることに似通う。

先に取り上げた黒川道祐『本朝医考』や奈須恒徳『本朝医談』初編・二編が名医家の家譜であつたり、貴顕の治療歴だつたりを記すが、扁鵲倉公伝のような神がかった治療譚はない。『本朝医考』が大己貴命から細川勝元に至るまで対象が古く、『本朝医談』も古文獻から記録をとっているので詳細がわからないこともあるだろう。江戸時代の医者を扱った浅田宗伯『皇国名医伝 正編』（嘉永5刊）になって、ようやく面白いのある性格や治療譚を含む医師伝が記されるようになる。漢方医学の功績を顕彰の意図からだろう。

実際の医者は耆婆や扁鵲や倉公といった神がかった医療能力を持つてゐるわけではないが、それでもわずかな手掛かりから病氣や病因を察することは名医と思われていたようである。

江島其碩の断本『軽口独機嫌』二の四（享保一八年刊）に次のような笑話がある。

#### 医者の本論義

ゐしや衆三人、表にはなしをしてゐられけるに、格子のさきにて小便する音のだら／＼とするを聞て、一人のゐしやのいへるは、みれば若いものじやが、勢ひのない小用の仕やうじや。あれは下元のよわみ、たしかに腎虚とみましたとあれば、今一人が、イヤ／＼せつしやの見たては、淋病ゆへに小用がだらつくかと存るといわれるれば、又一人のゐしや、額にしわよせ、じんきよでもりんびやうでもござらぬ。内に屁をふくんでゐるとかんがへました。

だからとした小便の音から病氣を診断する二人に対して、おならを我慢しながら小便をしているだけだと判断したところがおかしい。断本では珍診断の部類だが、名医の通念をもとにしているのが面白い。他の断本にも流用され『聞上手』二篇「見立」（安永二年序）や『はつ鰹』『医学』（安永十年序）、『咄の藏人』『医師』（文政三年序）にも同様の話が収録されている。

## 『近世畸人伝』『続近世畸人伝』と『皇国名医伝』

江戸時代の医者<sup>(注5)</sup>の伝記として、医者のみを扱ったものではないが伴蒿蹊『近世畸人伝』（寛政二年刊（一七九〇））および三熊花顛『続近世畸人伝』（寛政一〇年刊（一七九八））は医者<sup>(注6)</sup>を多く収録している。『近世畸人伝』『続近世畸人伝』（以下、両方あわせて言及する場合は「畸人伝」と記す）に収録されている医者<sup>(注7)</sup>を以下考察する。

「畸人伝」は士農工商のほか僧侶・神職・学者・画家・書家、さらに下僕、婢女、遊女・乞食など多種多様の人物を収録する。『近世畸人伝』では百人ほどのうち、中江藤樹・江村専斎・太田見良・戸田旭山、苗村介洞・北山友松子・戸田旭山・有馬涼及・甲斐徳本・山村通庵・松本駄堂・白幽子ら十二人が医者である。このうち中江藤樹は医者よりも儒者としての事蹟を認められて収録されたとみてよい。多彩な身分・職業から収録したうち全体の二割が医者であるのは多いといえるだろう。『続近世畸人伝』では杉山検校・村上等銓・松岡恕庵・下村道瑞・高森正因・栖林由仙・三井養安・江村専斎ら八人が医者である。

「畸人伝」に収録された医者<sup>(注8)</sup>を大星光史がそれぞれの伝記を紹介したのち、三頁におよぶまとめを残している。そこに記された「畸人伝」に収録された医者<sup>(注9)</sup>の共通点を、筆者が簡単にまとめると「確かな医療の実力を持っていること」「医者としての名声やお金にとらわれず、権勢や金持ちにおもねらなかつたこと」「医者としての実力と熱意のほかに人間的なやさしさをもっていたこと」「本人が長命で、健康で長寿であることを自ら実証していたこと」といえる。

「畸人」伝であり、「畸人」とは編者伴蒿蹊の序文によれば「世人に比べて変わっているが人間としてのあり方が天にかなった人」であつて、一見奇矯で変わったふるまいのように見えるが、それが正しい人たちのふるまいを集めたのが、『近世畸人伝』である。

ここで同じように江戸時代の医者<sup>(注10)</sup>の事蹟を記した浅田宗伯『皇国名医伝』正編と「畸人伝」を比較してみたい。「畸人

「伝」がかな混じりで平易に書かれているのに対し、『皇国名医伝』は訓点つきの漢文である。『皇国名医伝』のほうが医者にもともと興味がある層、とくに医者が有力読者層だったろう。

『畸人伝』が収録した医者のうち、浅田宗伯『皇国名医伝』正編に収録されたのは、甲斐徳本（永田徳本。括弧内は『皇国名医伝』の表記）、江村専斎、有馬涼及、杉山検校（和二）、北山友松子（寿安）、高森正因、太田見良である。一一四人の医者のうち七人が収録され、「畸人伝」との差は一人である。

なおここにあげられた医者のうち、『志都能石屋』が北山友松子を優れた医者としているほか、『夜船閑話』から白幽子から内観法を習った白隠のことを記している（八三頁）。気海丹田に力を張るという内観法は篤胤もとある老人から三十余りの都市から行うようになって病気をしなくなったという。そこから白隠の内観法も効果があったと推測している。

『畸人伝』と『皇国名医伝』とそれぞれの伝を比較すると、朝廷で養生のことを聞かれた江村専斎は「畸人伝」でも『皇国名医伝』でもほぼ変わらないが、ほとんどの場合、『皇国名医伝』は医療のエピソードを重視しており、「畸人伝」と『皇国名医伝』の両方に収録された人を『皇国名医伝』で扱うさいには、医療行為の記述が詳しくなり、医療行為以外のエピソードである地位や名声へ執着しない態度はあまり記されない。

たとえば徳本を『近世畸人伝』は薬籠を背負って一服十六銭で売り、秀忠の病を治しても十六銭しかもらず、かわりに友人のため甲斐の土地をもらったとする。『皇国名医伝』では牛に乗って一服十八銭で薬を売り、百十歳あまりで秀忠の病を治し、数十銭以外の褒美は固辞するものの友人のために甲斐に土地をもらうところまでは同じである。このうち徳本の療治が詳しく記される。徳本に限らず浅田宗伯は「畸人伝」を読んでいたと思われる。「畸人伝」の構成に肉付けする形で伝記が記されているからである。徳本に関しては『近世畸人伝』の最後に徳本の著述として『梅花無尽蔵』に触れているが、『皇国名医伝』も最後に『梅花無尽蔵』『医弁救急十九方』という著述に触れる形式で終わっている。

同じように北山友松子（寿安）では『皇国名医伝』が実際の療治を詳しく述べるのに『近世畸人伝』はそれを記さない。『畸人伝』のエピソードを『皇国名医伝』が省いた場合も少なくない。『続近世畸人伝』で北山友松子が貧乏人の治療費に寛大であったことや名古屋侯から多くの謝金をもらったときに、お金を貸しているものたちにとりて来るように門に札を立てた話などは『皇国名医伝』には入っていない。有馬涼及の人物を強く印象づける、角倉了以からもらった桜を横にし、自分も横になって鑑賞したエピソードは『皇国名医伝』にはない。太田見良の医事にかかわる部分は『近世畸人伝』も『皇国名医伝』も変わらないが、『近世畸人伝』が記した聖護院での太田見良の風流な暮らしや禅僧らとの交流は『皇国名医伝』にはいっさいない。高森正因は和歌五首が『近世畸人伝』に記されるが、それは『皇国名医伝』にはない。

『畸人伝』に収録されるが『皇国名医伝』にない医者は医療以外のエピソードが中心である。豪快な性格で人に奢ってもらうのを嫌がった苗村介洞、無欲な村上等銓や三井養安、質素な村岡恕庵、熊野で人參を見つけた松本駄堂、死霊にとりつかれた人を診察した山村通庵は『皇国名医伝』にはそもそも収録されていない。

以上のことからすれば、『畸人伝』では無欲で金銭に執着しない医者を取りあげ、『皇国名医伝』では療治に詳しい医者を名医としてとりあげたといえる。それぞれ医学観も反映しており、伴蒿蹊は『近世畸人伝』で北山友松子の著作の『刪補衆方規矩』、『評議纂言方考』『増広口決集』『医方考繩愆』などをあげるが「凡著述、他の書によりて吾意を述るものにして、一家の成書なし」という厳しめの評価をしている。『皇国名医伝』も列挙するが批判的な言辞はなく、追加で『友松子語録』を挙げているところからすれば、伴蒿蹊の考えに反対なのだと思われる。

また、興味深いのが三熊花顛『続近世畸人伝』の村上等詮への伴蒿蹊の評価である。村上等詮は東山院の皇子の急病を治して法眼を賜った医者で、「性大胆にしてしかも貪らず」として広島侯や薩摩侯の治療したときのお礼に変わったものを望んだ話が記されている。『続近世畸人伝』は三熊花顛の遺稿をもとに伴蒿蹊が完成させたものだが、村上等詮の項

には伴蒿蹊の補記がある。自分が小さいときに妹を治療してもらったがまったく効果がなくて亡くなっており、自分が小さいので村上等詮の行状はまったく知らなくて単に耳の遠い老人とだけ覚えていたという内容が記してある。唾科では京の山科家と共に名のある人だったと記すが、三熊花顛と伴蒿蹊の評価の落差が面白い。療治の詳細を記さないのは伴蒿蹊や三熊花顛が医者でないからだろうが、伴蒿蹊は療治の腕前を伝聞ほど信じていなかったのかもしれない。

## まとめ

以上のように「畸人伝」では無欲で金銭にこだわらない医者をとりあげているのに対して『皇国名医伝』では療治の経歴や実績を重視している。この点では医者でもあった平田篤胤も同等である。篤胤は中国の伝説的な名医である扁鵲や張仲景を非常に高く評価しているが、それは伝説を信じているのではなく、張仲景の場合は『傷寒論』の内容から、扁鵲に関しても伝説的な部分ではなく、現実味のあるエピソードをとりあげて参考になっている。扁鵲の療治を現実に参考になるものとして考察する態度は江戸時代の医者には珍しくなかった。その一方で、医者以外では奇談として扁鵲や耆婆が超人的な能力を発揮する名医譚が受け入れられていた。江戸時代の医学が漢籍をもとにしている以上、日本における名医伝は日本人の名医伝に限らず、扁鵲や張仲景といった漢人も含めた名医伝として受け入れられていたといえよう。実際には江戸時代は日本に名医が続出して漢方医学が独自の発展をとげた時代であるが、それが認識されるには漢方医学が西洋医学の圧力をうける幕末を待たねばならなかった。

「畸人伝」と『皇国名医伝』を比較すると、非医者で医者で名医のとらえかたが大きく違っていることに驚くが、後者に関しては患者への対応は必ずしも重視されていないように感じる。『志都能石屋』の上巻末には、自分が医者をやめた経緯のつぎに「医者風のわるく成たるも。実は病家もまたわるいからのことも有る」として、病家の悪い点の第一と



して「医者を殊の外に安く扱う」ことをあげている。続きは「門人云、これより以下はゆゑ有て除かれたり」として講演では語ったのところが『志都能石屋』には収録されてない。横谷南海『当世医者風流解』初編（文政四年刊）・二編（文政五年刊）という医者を題材にした滑稽本がある。<sup>（注）</sup>親も医者（注）の厚釜敷安という男が医学修業のために田舎から上京し、そのころ人氣の氣転頓作先生から医道の奥義を習うという内容である。厚釜敷安が実際にならったのは舌先三寸で病家をまるめこむ方策だった。いかに医者（注）が患者や病家をごまかしているかを誇張しながら述べている一方、名医が患者や病家対応だけで成り立つという矛盾も示している。結局、江戸時代の治療では医者たちが思うほど名医による治療の効果は実感しにくく、良い薬を使っているのに治療代が安いという点で評価されていると「畸人伝」からは感じる。それが評価となっているのは実際には治療費を割高に感じていたという証しだろう。超能力的な療治の力をもった名医伝の（注）みが受け入れられ、地道に医療を發展させた医者たちがの名前が広まらなかったのは日本人の名医伝のほとんどが漢文で書かれたことが関係しているだろうが、江戸時代人にとって名医の存在が現実味がなかったからだといえよう。

# 注

- 1 拙稿『近世小説の中の医者』（『東京医科歯科大学教養部研究紀要』39号、平成21）。
- 2 『志都能石屋』の引用は『新修平田篤胤全集』第十四卷（名著出版、平成13。初版は昭和52。室松岩雄編『平田篤胤全集』第一（法文館出版、明治44）にもとづく）収録のものによった。本文で示す『志都能石屋』の頁番号は『新修平田篤胤全集』による。
- 3 平田篤胤『金匱玉函経解』は注2前掲書に翻刻が収録されている。
- 4 福田安典『平賀源内の研究 大坂篇』（ベリかん社、平成25）「都賀庭鐘『通俗医王者婆伝』について—医師の描く戯作—」。同『医学書のなかの「文学」』（笠間書院、平成28）「漢方医学を装わせて描く『不老不死』—王者婆の伝」。劉菲菲「都賀庭鐘『通俗医王者婆伝』典拠考」（『国語と国文学』92（3）、平成28）。木越秀子「都賀庭鐘が『通俗医王者婆伝』に込めたもの」（木越治・

6 5 勝又基『怪異を読む・書く』国書刊行会、平成30）。

大星光史『文学に見る日本の医薬史』雄渾社、平成9、351～353頁。  
筆者による翻刻が『当世医者風流解』初編（三重大大学日本語学文学27号、平成28）と『当世医者風流解』二編（三重大大学日本語学文学28号、平成29）にある。

<ABSTRACT>

## **The good doctor of early modern times in Japan: “Shizunoiwaya”, “Kinseikijinden”, “Koukokumeiiden”**

YOSHIMARU Katsuya

Literature on doctors and medicine during the Edo Period in Japan was dominated by biographies. Few fictional novels were written at the time. Biographies of famous Japanese doctors during the Edo Period exist, but medical books were generally written in Classical Chinese. Medical practice was strongly influenced by Chinese medicine, therefore biographies of famous Chinese doctors were often used as reading material. As an example, Atsutane HIRATA, in his book *‘Shizuno Iwaya’*, showed his reverence to famous Chinese doctors such as Hen-jyaku and Cho- Chūkei. However, Japanese authors generally focused on the techniques that were used, rather than personalities. One example is the book *‘Kokoku Meii Den’* by Sohaku ASADA. A contrasting example are the books *‘Kinsei Kijinden’* and *‘Zoku Kinsei Kijin Den’*, in which the editor was not a doctor, and focused on personalities. Contemporary novels did exist at the time, and were more popular among regular people. Stories about doctors such as Gi-ba and Hen-jyaku and their mythical healing abilities were popular. These tales served as a diversion from the reality of the limits of contemporary medical techniques.